



有家中だより No11

令和7年 3月24日
南島原市立有家中学校
校長 本多 洋二

令和6年度修了！

早いもので、令和6年度も本日で最後、修了式を迎えました。生徒たちは、今年一年、色々な活動によく頑張りました。卒業生においても、第一志望に全員が進むことができ、46名全員が、15歳の春を笑顔で迎えることができたことを、大変うれしく思っています。今日の日を無事に迎えることができたのも保護者の皆様や地域の方々のお力添えがあったからです。心から感謝いたします。今日の修了式では、下のような話をしました。

修了式での話

4月から進級し、上級生になる1・2年生に「なってほしい先輩」としての姿を話しました。骨子は以下のとおりです。

1つめは、「尊敬される先輩になってほしい」

「尊敬される先輩」とは、礼儀の意味が分かり、時と場に応じた適切な行動や発言ができる先輩のこと。

2つめは、「信頼される先輩になってほしい」

「信頼される先輩」とは、どんなときでも、互いに励まし合い、高め合い、協力を惜しまない先輩のこと。

3つめは、「愛される先輩になってほしい」

「愛される先輩」とは、どんなときでも、互いの存在を、強さも弱さも持ち合わせた生身の人間として、まるごと認めよう、受けとめようすることができる先輩のこと。

明日からの春休みは、「尊敬される先輩・信頼される先輩・愛される先輩」になるために、自分は何をしなければならないか、何ができるか、自分自身を振り返り、考え、整理する時間を作ってほしい。そして、4月からの新年度に備えてほしい。

「お世話になりました」

今回の定期人事異動で、6名が退職・転勤することになりました。それぞれ本校の在職年数は違いますが、精一杯頑張ってきました。これまで支えていただいた保護者、地域の皆様に御礼を申し上げます。また、5名の転入者は以下のとおりです

<退職>

事務職員 栗田 工三（在職2年）
特別支援助手 小川 真依（在職1年）

<転出>

教 頭 松尾 博愛（在職1年）
南島原市立北有馬中学校（校長）へ

教 諭 高原 靖雄（在職6年）
南島原市立布津中学校へ

教 諭 下田 桃子
（在職4年、内3年は産休・育休）
佐世保市立中里中学校へ

講 師 臼井 千世
（在職1年 育休代替）
南島原市立口之津中学校へ

<転入>

教 頭 川口 高功
（南島原市立布津中学校から）

教 諭 森塚 菜穂子
（南島原市立布津中学校から）

教 諭 松田 恋（新規採用）
事務職員 古賀 功輝（新規採用）

特別支援助手 近藤 ますみ
（南島原市立西有家中学校から）

ブレイクコーナー

自分の考えや人の考えの受け売りです。気軽に読みください

教育ジャーナリストの加藤紀子氏が書かれた本に興味深い内容がありましたので、紹介します。

根拠のない自信



人は自分に自信がもてなければ、相手に拒否されて傷つくことを恐れ、人付き合いを避けようとしてしまいます。子どもも同じです。「自分はこれでいいんだ」と考える子どもは、自信をもって自分の気持ちを表すことができます。

20年にわたり、5000回以上の面接を通して子育ての悩みに寄り添ってきた、医師で臨床心理士でもある田中氏は、子どもが親から見て間違っただけを主張してきたときには、それを理屈で否定しようせず、意見を言えた勇気を認めてやるのが大切だと言っています。人が人として生きていくには、「理由はないけれど、うまくいくような気がする」といった、無条件に自分を信じる力がとても重要です。つまり、根拠のない自信が大切になってくるということです。

自分はいつも認められているという実感が、相手との心の壁を取り払い、コミュニケーションへの意欲につながるのです。

では、子どもに「根拠のない自信」をつけてあげるにはどうすればいいのでしょうか？
(右上へ ↗)

「テストで100点をとった」「大会で一番になった」といった具体的な成果をほめるのもよいですが、そこから生まれる自信は根拠に基づいたものです。根拠のある自信は、根拠となる事実が消えるとなくなってしまいます。根拠のない自信は、そうした条件付きの自信ではなく、親からありのままを受け入れられ、愛されているという実感から生まれるものです。苦手なことをがんばって克服するのは大事なことです。しかし、親が固執しすぎて子どもを追いつめると、自信どころか劣等感ばかり増してしまう可能性があります。

子どもは小学校に入るところから自分と他者を比較するようになり、「負けたら悔しい」といった感情をもつようになります。大切なのは負けたとき、落ち込んだときに立ち直る力を身につけることです。この回復力は、心理学では「レジリエンス」と呼ばれています。

子どもが失敗したときも、他の子と比べるのではなく、良い面に注目して「よくがんばったね」「勇気があったね」などと認めてあげると、立ち直る力を伸ばしてあげることができます。児童青年精神科医の佐々木正美医師は、「子どもは自分を信じてもらうことによって、信じてくれた人を信じます。そして自分が信じられたことによって、自分を信じることができます」と言われています。まずは親が子どもを信じる。そうすれば、子どもは親を信じ、自分を信じることができます。親の関わり方が大切になってきます。自分の子ども時代を思いおこしながら子どもと接したいものです。

本号をもちまして、令和6年度の学校だよりは、最終号となります。1年間、御愛読いただきありがとうございました。